

『おくのほそ道』の構想臆断：高館

紫藤，誠也
神戸女子大学文学部講師

<https://doi.org/10.15017/12034>

出版情報：語文研究. 54, pp.1-12, 1982-12-20. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

『おくのほそ道』の構想臆断

— 高 館 —

紫 藤 誠 也

「おくのほそ道」の文章は、魅力にみちている。中学生の時初めて読まれた松島の段の軽快なリズムが印象に残る。「月は有明にて光をさまれるものから」を源氏物語から引用しているという注が、妙に心をとらえたのを覚えている。その後で、先達の思いがけない誘いに甘え、源氏物語の論議に加わるようになり、「古今六帖で読む源氏物語」という方向で、もっぱら紫式部の頭脳の中に分け入りつつ、岷江入楚や湖月抄に親しむ日々を重ねてきたようだ。

あれは、昭和三十九年だったか、芭蕉忌二百七十年記念の「芭蕉の生涯展」を見た。多くの芭蕉の真蹟に接して感激する。出品の中に、「埋木」があり、北村季吟の奥書を書きとめたりもした。（これには、異論もあるようだが）その後、湖国を廻り、幻住庵の跡を訪ね、義仲寺の芭蕉墓に詣る。そんなころ、ふとしたことで、高館の段には、人麿の「近江荒都」の長歌が関連することを思いつく。主に源語を心がけているので、「しろうとの寝言」と笑われそうだと、心の中に秘めていた。たまたま、万葉集と「おくのほそ道」とを手短くまとめる必要にせまられ、「春草の初夏草や」の小論を書き、芭蕉の万葉集への関心の一焦点を見出すことができた。

昨、昭和五十六年秋、「漂泊の詩人——芭蕉展」で、北村季吟の『万葉拾穂抄』の出版を待望した芭蕉書簡を見て、自分なりに芭蕉観をまとめてみようと思いに決める。今年になって、岡田利兵衛翁が亡くなられた。数年前、ひとりで柿衛文庫を訪ねて、神戸市内の高校国語科研究会員のため、ご講演と芭蕉真蹟展観とをお願いした。さっそく快諾いただいたが、当日はご健康の都合で講演はできない、真蹟は使いの者に持参させるということになる。そして、「南無天満大自在天神」の一行物・「庭興即事 作りなす庭をいさむるしぐれかな」など、惜しげもなく見せていただいた。それから毎

年きまって賀状もいただくようになり恐縮するとともに、秘かに「現代の芭蕉翁」と思っていた。

芭蕉という人の頭脳の中に立ち入ることは、紫式部とならんで難かしい。以前に購入していた関係の書籍も、久しぶりに書架から取り出すことになった。多くの人々の心をとらえている「おくのほそ道」——こんな見方も、あるいはできるのではないかというつもりで、まとめた拙論である。まず、高館をとりあげる。別稿で、松島・象潟その他の段へと考えてゆきたい。

平泉、高館の段は、七つの文と二つの発句とで構成される。またまる語句ごとに一字分の空白を置いて整理して見よう。

- ① 三代の栄耀えいよう 一睡いすいの 中にして 大門の 跡は 一里
こなたにあり
- ② 秀衡が 跡は 田野になりて 金鶏山のみ 形を残す
- ③ まづ 高館に のぼれば
北上川 南部より 流るる 大河なり
- ④ 衣川は 和泉が城しろを めぐりて 高館の 下にて
大河に 落ち入る
- ⑤ 泰衡等が 旧跡は 衣が関を 隔てて 南部口を さしかた
め 夷をふせぐと みえたり
- ⑥ さても 義臣 すぐつて この城しろに こもり 功名ひととぎ 一時の
叢くさむらとなる
- ⑦ 国 破れて 山河さんがあり 城しろ 春にして 草青みたり と
笠 打ち敷きて 時の 移るまで 泪を 落しはべりぬ
- ⑧ 夏草や 兵どもが 夢の跡
- ⑨ 卯の花に 兼房みゆる 白毛かな 曾良

奥州藤原氏、清衡・基衡・秀衡「三代の栄耀」の歴史も、「一睡の中」と書き初めて、「大門の跡」は「一里」も「こなたにあり」と現況をいう。「一里」は、「三代」・「一睡」と並んで数字「一」を含む語を用い表記したもので、里程を正確に必ずしもあらわしていないものと考ええる。①は、平泉の歴史と現況を先ず説き始める

「起」の部分に相当する。

②「秀衡が跡は田野になり」は、平泉の歴史を支えた人物の居住の「跡」も、今や「田野になり」と眼前の現況をいつている。「秀衡屋敷」でもよいのに、①につづいて②でも「跡」をくりかえす。

「金鶏山」は、「ある」とか「聳ゆ」と書いていない。秀衡が平泉鎮護のため、富士山の形に築いて山頂に黄金の鶏を埋めた伝説というか、歴史というものをにおわせるとともに、当時のもの皆すべて消滅しているのに、眼前に僅かにこれ一つだけ、昔のままの姿で残ることを強調して「形を残す」となる。「のみ」がよく利く。ここで、まず「山」を語る。

③・④は、九郎判官義経滅亡の地、高館からの眺望で、「大河」の語がともに出て、「北上川」と「衣川」とが並ぶ。「河」を語る。平泉の北方に広がる「南部」地方と、父の遺命を守り義経のため奮戦して命を捨てた、秀衡の三男、和泉三郎忠衡の居城「和泉が城」の方角を見渡している。平泉の次の段では、「南部道遙にみやり」と書く。和泉三郎を「勇義忠孝の士」とほめた、えたのは、平泉を訪ねる前、塩竈明神に詣った時だった。神前の古い宝灯にその寄進名を見つけ、「佳名今に至りて、暮はずといふことなし」と記す。「和泉が城」で「城」を語り、これにも、平泉の滅びの歴史の影を伴う。

⑤も同じ眺望。「泰衡等が旧跡」は「等」とあることから、藤原氏一族の住んだ平泉一帯の旧跡であろう。①②に出る「跡」を「旧跡」の語にかえる。泰衡は、秀衡の次男。父の遺命に背いて源頼朝に従い、源義経追討に協力して、後では頼朝に滅ぼされた。義経滅亡に、直接関連する泰衡をここに出し、次⑥の「義臣」へのつながりを持たせる。歴史的事実の回顧がここにも出る。「衣が関」は歌

枕。前の③に出た「南部」ともかわる「南部口」を「夷をふせぐ」要地と「見えたり」で、芭蕉が、眼前の実景を見ていることを確実に表現している。

⑥は、眺望も終えて、今いる高館こそは義経戦死の地とも伝えられる、その歴史的事実への回顧に耽り、眼前の現況説明となる。

「義臣すくつて此の城にこもり」では、③④でくりかえした「高館」を「此の城」といいかえ、④の「和泉が城」の「城」ともひびきあわせる。せっかくながら義臣が集まって、奮戦して立てた功名も、まったく、「ひと時の夢」にすぎない。今、目の前に見られるものとしては、夏草の背丈は高くのび、青々とした「叢」だけである。「功名一時の叢」は、「栄耀一睡の中」①と照応する。また「一時」は、①の「一睡」・「一里」と同じ数字「一」を含む語を用い表記している。「一時」を、「ヒトトキ」と読むことは後述する。

以上②～⑥は、①の「起」の部分を用いて、「承」の部分となる。

⑦の前半——杜甫の五言律詩「春望」の最初の二句、

国破レチ山河在リ城春ニシテ草木深シ

を借りて、「草木深」の「木」を省いて「草」だけにすると共に、「深シ」を「青みたり」と書き改める。こういうふうには杜詩を借りながら、「草木」を「草」だけに書きかえたことで、前の⑥の「叢」とも、⑧の「夏草」、そして⑨の「卯の花」ともよくひびきあう。服部南郭が「ふるごとを用ゆれども拘らず。意あたらしふして義を害せず」と言ったのが思い出される。

こゝは、「転」の部分となる。

⑦の後半——芭蕉は、「笠」の緒をひもといてぬぎ去り、傍に置いて腰をおろした。「打ち敷き」である。これは、立ちどまって

すぐさまこゝを去り、また旅を歩きつづけるのではなく、歩みをもやめ、いわば脱帽して敬虔な気持ちにひたっている様子である。そして「時の移るまで」とは、駆け足、素通りの物見ではない、時間の経過も忘れるほど長くの意がこもる。「栄耀一睡」「功名一時」のこの地で、芭蕉は、精一杯の長い時間を費して、ここで展開された歴史的事実を思い出し、往時を憶びながら、目の前のこの平泉の小天地の荒廃した現況を見渡しては涙ぐむ。それが「泪を落しはべりぬ」こゝは、「結」の部分である。

この平泉で、展開された歴史的事実を回顧しながら、現況を加えて①～⑥で述べた部分、それは、山河、城の順序にもなっている。それぞれに、同じ語・似た表現がくりかえされ、①と⑥、②と⑤、③と④とは互いに照応する。この照応は、対句的表現とも見ることができよう。①～⑥で、見たままの実景に、ここで展開された歴史的事実を加えた芭蕉の感慨は、⑦の後半、すなわち高館の段の文章部分といおうか、本文の最後尾に凝縮している。そのあとに、⑧「夏草や」と⑨「卯の花」との発句がつづく。⑧の「夢の跡」の「跡」も、①②、⑥の「跡、旧跡」と無縁ではない。⑨の「卯の花」が、⑧の「夏草」と関連することは、いうまでもない。①～⑥の各文には、それぞれ、五音、七音にまとまる語句がちらばり、全文のリズムはきわめてなめらかである。発句が二句あるそのすぐ前、本文の最終部分に、筆者のいわんとするところが凝縮する。こういう幾つかの特徴を持つことから、この高館の段は、万葉集に見られる長歌と反歌の体裁によく似ているものと見ることがができる。

こゝで、斎藤茂吉の「長歌小感」を引用する。

「長歌が、個人発生的であらうが社会発生的であらうが、長い形式にするには、その前に声調の調和と抑揚と変化と緊張とを保ちつつ続けて行くのであるから、自然に繰返しとか対句とかいふやうなものが出来て来る。」

「次に、長歌はかくの如くに「連続声調」であつて、繰返しがあり対句があり、序詞があり、枕詞があり、等々のために、その意味の内容は比較的単純である。」

右のように、長歌の特徴が要約されている。「繰返しとか対句とかいふもの」は、高館の段には幾つか認めることができる。「その意味の内容は比較的単純である」というのは、「内容的にいへば、前の大部分は謂はば序幕のやうなもので、主眼は終の方の、五六句にあるのである」と齋藤茂吉は、柿本人麿の「近江の荒れたる都を過ぎし時」作つた長歌の評釈篇に説明する。

短歌の歌体は、五音・七音の五句構成で、長歌は五音・七音の七句またはそれ以上で構成されていると解するとき、この高館の段の本文が七文で構成されていると見られることも、いわば最小の長歌の構成と見なすこともできる。

この高館の段を、柿本人麿が「近江の荒れたる都を過ぎし時」に作つた長歌とをならべてみると、長歌には反歌二首があり、高館にはリズムカルな文のあとに二句がつづくのとよく似ている。芭蕉は、たしかに、人麿のこの長歌に倣っている。

二

近江の荒れたる都を過ぎし時、柿本朝臣人麿の作れる歌

29 a 玉だすき 畝火の山の 檣原の ひじりの御代ゆゑ

b あれましし 神のことごと 櫻の木の いやつきつぎに

天の下 知らしめししを¹⁰✪

c 天にみつ 大和をおきて 青によし 奈良山を越え¹⁴✪

d いかさまに 思ほしめせか✪ 天離る 夷にはあれど¹⁸

e 石走る 近江の国の 楽浪の 大津の宮に²²

f 天の下 しらしめしけむ 天皇の 神のみことの²⁶

g 大宮は こと聞けども 大殿は こと云へども³⁰

h 春草の 茂く生ひたる 霞立ち 春日の霧れる³⁴

或は云ふ 霞立ち 春日か霧れる 夏草か 繁くなりぬる

i ももしきの 大宮処 見れば悲しも³⁷✪

反歌

30 楽浪の 志賀の唐崎 幸くあれど 大宮人の 舟待ちかねつ

31 楽浪の 志賀の✪ 大わだ よどむとも 昔の人に

またもあはめやも✪

注 長歌の全三十七句には、第一句よりの順番を、句尾に数字で一部省略してつけ、また、長歌を、構造上から見て、a ~ i に区分する。歌頭の数字は国歌大観番号。✪は、「或は云ふ」「一に云ふ」の割注の省略を示す。

この長歌は、枕詞と対句の使用が多いということから次の形態と考える。() は、枕詞を示している。

(a) (1) . 2 . 3 . 4

(b) 5 . 6
(7) . 8 . 9 . 10
(c) (11) . 12

(d) 15 . 16 . (17) . 18
(e) (21) . 22

(f) 23・24・25・26

(g) 27・28
29・30

(i) (35)・36—37

(h) 31・32
33・34

神武天皇以来の都の地の大和から、天智天皇の近江京へ遷都された歴史的事実を長々と歌い、今や荒れはてた旧都の跡に立ち、眼前現実の光景(h)に、「大宮処——見れば悲しも」と長歎息する。

旧都の荒廃を歎く人麿の感懐は、この長歌の最終部分(i)に凝縮している。その実景描写(h)で「或云」「二云」には、「夏草か繁くなりぬる」と「夏草」も出る。「近江の荒都」と平泉の「三代の栄耀一睡」の地。歌聖人麿の長歌。芭蕉は、この長歌の歴史的事実と眼前現実とを織りませて描写する手法を、高館の段の構想にとり入れている。あこがれの平泉を訪ねて眼前現実の光景に涙し、「見れば悲しも」の実感、そのまま高館での「笠打ち敷きて、時の移るまで、泪を落しはべりぬ」という表現になったものと解される。

芭蕉自身が「泪する」場面は、この「ほそ道」の旅でも何度か目につく。その主なものを挙げてみる。「前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそそぐ。行春や鳥啼魚の目は泪」(旅立の段)これは、いわば「惜別」のそれ。「佐藤庄司が旧跡は、左の山際一里半斗に有。(中略)麓に大手の跡など、人の教ゆるにまかせて、泪を落し、又かたはらの古寺に一家の石碑を残す。中にも、二人の嫁がしるし、先哀也。女なれどもかひなくしき名の世に聞えつものかなと袂をぬらしぬ」(佐藤庄司が旧跡の段)ここは「懐古」のそれ。「爰に至りて疑なき千歳の記念、今

眼前に古人の心を閲す。行脚の一徳、存命の悦び、羈旅の勞をわすれて、泪も落るばかり也」(壺の碑の段)これも壺の碑を見て感動感激した「懐古」のそれ。平泉では、まず「笠打ち敷き」敬虔な気持ちになり、「時の移るまで」時間の経過も忘れるほど長く、というの、いわば空間に占める己が身体と、こころ(精神)とを精一杯よくとのえ、時間も超越するほど、「懐古」の「泪を落し」たことで、これは、人麿の「大宮処——見れば悲しも」にもまさる感動が文字になって書かれたことになる。

「荒れたる都」近江京の跡を眺めて作ったこの長歌には、枕詞を始めとして、くりかえし、対句といったものが多く、長歌の特色がよく出ている。反歌二首では、琵琶湖の湖岸に目を移し、近江京繁栄の昔を思い起こしている。

芭蕉は、こういう長歌の特徴をよくとらえ、枕詞は使用しないがくりかえし・対句的な照応を用いながら、「夏草」の語をも学びとり、「荒都」にも似た「三代の栄耀一睡」の地、高館を述べる文章の構想を立てたものと考ええる。

この人麿の長歌で、(h)の「或云」を漢字で二行の割注にしているのは、寛永二十(一六四三)年刊記の板本万葉集である。

芭蕉の師、北村季吟の著「万葉拾穂抄」巻一では、「二云」を本文より一字上げて二行にまたがり、仮名書を主に傍に小さく漢字で、

霞立 春日 香 霧流 夏草 香 繁 成 奴留
かすみ立つはるひかきれるなつくさしけくなりぬる
とする。

芭蕉が季吟の万葉集著作へ関心を持っていたことの、よくわかる元禄元年十二月五日付の其角宛の書簡がある。「極月五日 芭蕉生」

と署名し、敬称つきの「其角生丈」と宛てている。「道中此か大津よりの御状相届、御無事の左右珍重に存候」で始まる。その九月中旬に江戸を立ち京都へ上った其角の大津からの来信への返事である。その追伸にこう述べる。

去来・允膏両子へ御心得たのみ存候。湖春御逢候はば、御心得。春は早々、于レ今残念に存候。万葉集出来候哉。急便承度候。

五条之老翁、御機嫌いぶかしく奉存而已。

允膏は、凡兆の本名允昌の宛て字で、去来とともに、この二年半の後は、「猿蓑」の編集に従った。湖春は北村季吟の長男。五条の老翁は季吟。京の五条、新玉津島神社に住んでいた。この時、其角は季吟より歌書の講義を受けている。

「万葉集出来候哉。急便承度候」の万葉集は、季吟が五年もかかって完成した全巻初の注釈書「万葉拾穂抄」のことで、この年末に出版が始まっている。「急便承度候」という、芭蕉の万葉集への、なみなみならぬ熱意がうかがえる。これは、なんと「おくのほそ道」の旅に出る三カ月ほど前の心境である。

三

芭蕉が、平泉を訪ねたのは元禄二（一六八九）年五月十三日（陽暦六月二十九日）である。曾良の「旅日記」を見よう。

一 十三日 天気明 巳ノ尅ヨリ平泉へ趣（一里）山ノ目（志り半）平泉へ以上式里半ト云氏式リニ近シ高館・衣川・衣ノ関・中尊寺・（別当案内）光堂（金色堂）・泉城・さくら川・さくら山・秀平やしき等を見ル（泉城ヨリ西）霧山見ゆルト云氏見ヘスタツコクカ岩ヤへ不行 三十町有由 月山・白山ヲ見ル 経堂ハ

別当留主ニテ不開 金鶏山見ル シミン堂・无量劫院跡見 申ノ上対婦ル 主水風呂敷ヲシテ待 宿ス

これが平泉巡見の一日で、往復五里足らずの約二十村、「巳ノ尅」（午前十時）に出て、「申ノ上尅」（午後四時）に再び一の関の宿へ帰った。この「旅日記」に記載されている中で、中尊寺の段では光堂・経堂の二つ、高館の段では、高館・衣川・衣の関・泉城・秀平やしき・金鶏山の六つが、「おくのほそ道」の文中に出ている。あの多彩で、リズムに富む文体は、すべて芭蕉の苦心彫琢の結晶である。そういう中で人唐の「近江荒都」を詠んだ長歌との関連は、きわめて重要であるといわねばならない。

四

高館の段には、また謡曲「邯鄲」の投影も多くみかける。

「一睡」を、指摘する注はある。「栄耀」を「エエウ」と読む注は、少い。これだけではない。「一時」と「夢」とがある。それらと関連する語も並べて、使用度数を示そう。

- | | | | |
|-------------|-----|-----|-----|
| (ア) 栄耀 | 1例 | 栄花 | 10例 |
| (イ) 一睡 | 2例 | 一炊 | 1例 |
| (ウ) 一時（ひと時） | 1例 | | |
| (エ) 夢 | 10例 | 夢の世 | 1例 |
| | | 夢路 | 1例 |
- 次に、右の語の出る文の中、主なものを順に引用してみる。

- (1) さてその邯鄲の枕はいづくに候ふぞ、さあらば一睡まどろまうずるにて候。
- (2) 玉の御輿に法の道、玉の御輿に法の道、栄花の花もひと時の、夢とは白雲の、上人となるぞ不思議なる。

(3) 汲めども汲めども、いや増しに出づる菊水を、飲めば甘露もかくやらんと、心も晴れやかに、飛び立つばかり有明の、夜昼となき楽しみの、栄花にも栄耀にも、げにこの上やあるべき。

(4) 盧生は夢さめて、盧生は夢さめて、五十の春秋の、栄花もたちまちに、ただ茫然と起き上がりて、さばかり多かりし、女御更衣の声と聞きしは、松風の音となり、宮殿楼閣は、ただ邯鄲の飯の宿、栄花の程は五十年、さて夢の間は粟飯の、一炊の間なり、不思議なりや計り難しや、つらつら人間の有様を案ずるに百年の歎案も、命終れば夢ぞかし、五十年の栄花こそ、身のためにはこれまでなり、栄花の望みも齡の長さも、五十年の歎案も、王位になればこれまでなり、げになにごとも一睡の夢、南無三宝南無三宝、よくよく思へば出離を求むる、知識はこの枕なり、げに有難や邯鄲の、げに有難や邯鄲の、夢の世ぞと悟り得て、望みかなへて帰りけり。

(ア) 栄耀——(3)の「有明の夜昼となき楽しみの、栄花にも栄耀にも、げにこの上やあるべき」から採る。「栄花」とほとんど同じ意味だが、「栄耀」の字面にひかれて使用したのか。謡本には(エヨオ)とよみがなががある。「エエウ」と読むのがよい。

(イ) 一睡——2例のうち、(4)の「げになにごとも一睡の夢」が、「三代の栄耀一睡」へ色こく投影する。「イッスイ」は、(4)の「さて夢の間は粟飯の、一炊の間なり」の「一炊が本来の文字である。謡曲「邯鄲」では、このように両字例を使っている。

(ウ) 一時——「ひと時」(岩波・大系)「一時」(小学館・全集)と表記するが、宝生流の謡本(昭和版)は、「一ト時」と「ト」の字

を小さく書き、譜点を四つ付ける。(2)の「栄花の花もひと時の、夢」の「ひと時の夢」にもとづく。「花もひと時」は、古今集・巻十九、雑体(一〇一六)、僧正遍照の「秋の野に なまめきたてるをみなへし あなかしがまし 花もひととき」に出る。右の「大系」・「全集」二つの「謡曲集」とも、この注をしていない。芭蕉

は、この「邯鄲」の「ひと時の夢」が念頭にあったものと、考えられる。したがって、「功名一時」も「功名ヒトトキ」と訓むのがよい。勝峯晋風氏の「奥の細道創見」が「ヒトトキ」と訓むだけで、在来の諸注は、みな「イチジ」と訓むのは正しくない。「一時」と芭蕉が漢字書きにしているのは、「三代・一睡・一里・一時」と、「一」という数字を含む語を好んで並べた趣向で、その好みはつづいて次の中尊寺の段でも、数字を含む語の羅列が続く。「二堂・三将・三代・三尊・七宝・四面・千歳・五月雨」となっている。日葡辞典には、「イットキ」「ヒトトキ」を収め、「イチジ」はない。

(エ) 夢——(4)の、「つらつら人間の有様を案ずるに、百年の歎案も、命終れば夢ぞかし」と、「げになにごとも一睡の夢」とある「夢」とが、ともに投影している。はるばる訪ねて来て、今ここ高館に立ち四方を眺むれば、ひとときわ青々と繁茂する夏草。真夏の太陽の下、その、たくましく、そして、悩ましく、茂りあう叢に、芭蕉が見たのは、「ひとときの夢」の「跡」であり、藤原氏三代の九十余年の「栄耀栄花、歎案も命終れば夢」にすぎない「げになにごとも一睡の夢」であった。

このように、高館の段の構想の背景をさぐると、謡曲「邯鄲」からは、詞句だけでなく、その思想をも吸収している。

「富士の雪盧生が雪を築かせたり」は、「六百番俳諧発句合」に

出る芭蕉の延宝五（一六七七）年、三十四歳の作。謡曲「邯鄲」で盧生が夢に見た楚の王宮の様子を「東に三十余文に銀の山を築かせては、黄金の日輪を出だされたり」をまかせる。同じく謡曲「邯鄲」に想を借りているものの、この深さに及ばない。前田正雄氏は、「邯鄲」から「一睡」の語を本文に採用（引）という。以上見たように、高館の段には、「一睡」の語だけではない。

五

「国破れて山河あり、城春にして……」が、杜詩を出典とすることは、最古の注釈である鴻池村徑の「奥の細道鈔」に始まり、笠笠庵梨一の「奥細道菅菰抄」も、「青みたりと換骨せし也」と述べる。「草木深」は、当時の訓で、「草木深みたり」と読むことが行なわれてゐたであらう（引）とは、井本農一氏の説。もしそうなら、「草木」が「草」だけになぜなったのか。小西基一氏は、「杜詩を表に出すけれども、かならずしも杜甫だから発想したとは決められない。「草木深」が「草青みたり」と言いかえられているが、田野夫の詩に「草青々」とあったとおり、こういった情景にいつも使われる言いまわしであつて、ほかにも（中略）、例が多い」といふ。なるほど、他の漢詩に学んだとも、あるいは考えられるだろう。

芭蕉は、杜詩「春望」によりかかりながら、積極的に「草木深」を「草青みたり」と換えたのである。それは、「夏草」の語を、人麿の「近江荒都」の長歌に得て、その高館の段の執筆の構想は一大躍進をしたことを見逃すわけにはいかない。「三代の栄耀一睡の中」の廢墟平泉を真夏に訪れ、高館に上り「夏草」繁る「叢」を見た。歌聖人麿の長歌に出る「夏草」に自信を深めて、「草木深」か

ら「木」を省き、「草」だけにして「青みたり」と換えたのである。こうすることで、漢詩の二句は、この文中にもよくとけこみ、少しも違和感がない。漢詩を借りて、わがものにしたのである。

六

この高館の段は、柿本人麿の「近江の荒れたる都を過ぎし時作れる歌」と重ねて読まれることを、「春草のと夏草や」の小論にまともたのは昭和五十一年であつた。この度、この拙論を作成するため調査していく中で次のようなことを知つた。

萩原井泉水氏の「奥の細道評論」は、昭和三年に刊行された。

さて「夏草やつはものどもが夢の跡」の句——此意味は前文を以て殆ど尽してゐるので、つまり、長歌の後に反歌がついてゐるやうなものである。「夏草」といふのは、前文の「一時の叢となる」の「叢」であり、「つはものども」は「義臣すぐりて此城にこもり」の「義臣」であり、「夢の跡」は「三代の栄耀一睡の中」の「夢」である。勿論、これは義臣等が功名の夢であつて、藤原氏が三代の夢を指したものではないとしても、若し「三代の栄耀一睡の中」といふ言葉がなかったとすれば、此句は解し難いものとなる。

「夏草や」の句を前文とで長歌と反歌の関係でとらえた最初の卓見である。惜しいことに、人麿作の長歌という指摘は全くない。

杉浦正一郎氏の「奥の細道」の制作心理——平泉前後」は、昭和二十六年三月、「文学研究」に初めて発表された。

芭蕉の「夏草や」の句は「先高館にのべれば」以下の文章と密接に結合してゐる。謂はば長歌と反歌のやうな関係である。人々

はこの発句を発句単独でよむより「細道」本文中において眺める
とき、はるかにすぐれた芸術的興奮を感じるだらう。芭蕉は緊密
な文章を述べて来た高館の述懐を「夏草や」といふひとつの季語
でひきしめ、一焦点を合せて作品に結晶せしめたのである。

杉浦氏が、本文と句との關係を長歌と反歌で見る点では、井泉水
氏の見解と同じである。

山本健吉氏は、「芭蕉——その鑑賞と批判」を、昭和三十三年に
刊行された。「夏草や」の句についてこう書いている。

杜甫の詩は、ともかくも、私は、「夏草や」の詩句からは、人
麻呂の近江旧都を過ぎた時の長歌と短歌二首を想い出す。長歌
のなかに、「春草のしげく生ひたる體立ち春日の霧れる」の詩句
がある。この人麻呂の歌は、「小諸なる古城のほとり」や「荒城
の月」のような懐古の詩であるばかりでなく、顧られない廢都の
精靈を慰める気持を含めた、公的な儀式歌である。(中略)

その点で、時代の相違はともかくとして、この句は人麻呂的発
想につながるものを持っている。そのことが、この句の感動の波
を、非常に大きいものにしてゐる。

井泉水氏が「長歌と反歌」に見立てた見解は、山本氏による人磨
長歌を想い出す段階へと進んできてゐる。とはいへ、山本氏の指摘
は、「夏草や」の句から、人磨の長歌と短歌二首を想い出し「
ているが、高館の段の構想への影響にまで到達してゐないのが、惜
しまれる。

関良一氏は、「教材研究のあり方」で、「奥の細道」にも言及さ
れた。昭和三十八年六月である。平泉の段の前半を、(一)〜(七)まで七
つの文に分けてゐる。七つに分ける点では、拙論と同じであるが、

分かち書きにはしてゐない。

数詞を多く用いた詩文風のレトリックは、後半(中略)と同巧
異曲で、改めて説くまでもないが、杜詩との關係から、「山」と
しては「金鶏山」、「河」としては「北上川」「大河」「衣川」
「大河」、「城」としては「高館」「和泉が城」「この城」とく
り返してゐる。(中略)ところで、右の(一)〜(四)、(三)〜(四)が左右
相称で、(中略)いわば三重の玉手宮式の布置をもった文章にな
つてゐる。(中略)この文章は、そのような読み方をすれば、い
わば四六文以上の四六文であり、対句なり聯句なりのトリプル・
プレイにおいて、まさに俳文的技巧の粋を凝らした文章だった。
あるいは、立体派的と言つてもよいかもしれぬ。(七)は、以上の主
文に対する、いわば反歌だろう。文の数を奇数にとどめたことに
も、それなりの必然性があつた。

関氏が平泉の段の前半に、「くり返し」・「左右相称」・「対句
なり聯句なりのトリプル・プレイ」を認めることには賛同できる。
「(七)は、以上の主文に対する、いわば反歌だろう」とするのは、解
しかねる。「文の数を奇数にとどめた」ことを、拙論のように、長
歌の句数で見ればよかつたと思はれる。

拙論は、高館の段で、芭蕉の構想を助けたもの、三つという。ま
ず、人磨の「近江荒都」の長歌と反歌があつた——この長歌のもつ
特徴を吸収して、歴史的事実をいうとともに、眼前現実の光景を織
りこむことを忘れない、本文の最終部分に芭蕉の感慨をまとめる。

発句二句は反歌二首に似る、「夏草」の季語が長歌の中にも出てい
る。さらに、謡曲「邯鄲」にもまたがり、杜詩にも乗って、独自の
多彩でリズムカルな文章になつてゐることを明らかにした。

芭蕉が、高館で遠くを眺め近くを見渡しながら、季語に採用できるものは、いろいろあっただろう。何より、曾良の「卯の花や兼房見ゆる白毛かな」に出る「卯の花」がある。「夏山」でもよい。(黒羽の光明寺行者堂での「夏山に足駄を拜む首途哉」)「夏木立」でもいける。(雲巖寺に仏頂和尚旧庵を訪ねた時、「木啄も庵はやぶらず夏木立」)その他いろいろあるだろう。

芭蕉は迷わなかった。高館で見たのは、「夏草」の「叢」だったのだ。前日の「合羽モトヲル」大雨もウソのように晴れあがり、真夏の太陽の下、青さのひとしお増した「叢」を見たのだった。

「夏草やつはものどもが夢の跡」が、高館で即座に詠まれたか、よくはわからない。随行した曾良の『俳諧書留』にも記載されていない。「おくのほそ道」の旅行後、二年経過した元禄四(一六九二)年七月三日出版の、去来・凡兆編の『猿蓑』に初めて見られる。巻之二の「夏」の部に、「奥州高館にて」の前書がついて出ている。

七

「おくのほそ道」の成立時期については、決定的にいうのは難かしい。芭蕉が自分の所持本にするために、原稿を兼竜に清書させたといわれる兼竜筆芭蕉所持本が出来上ったのは、元禄七年の初夏である。これは、その初冬、十月十二日逝去の約半年前になる。

ただし、これは現在見られる「おくのほそ道」の全巻が成立して清書された時期である。部分的というか、それぞれの段は各個に、奥羽旅行後、適当な時期に、早くも執筆が始まり、それぞれ、たえず推敲が続けられたものとも考えられる。そういう考えに立つとき少くとも、この高館の段は、「夏草や」の句が、『猿蓑』に編集さ

れるまでに、本文・句ともにできていたものと考ええる。「夏草や」の句だけで、独立するとも見られるが、やはり、本文を備えて始めて、長歌と反歌との関係にも似た、密接不離の味わいが生きて、句のよさもましてくる。

芭蕉は、元禄二年八月下旬、大垣に着いて、この「おくのほそ道」の大旅行を終える。九月に伊勢の遷宮を拜み郷里へ帰った。それから元禄四年十月の末、江戸に帰るまでの約二年余りを、郷里の伊賀上野・京都・湖南の各地と、漂泊の旅をつづけている。元禄三年の正月を琵琶湖畔の膳所で迎え、四月から七月下旬まで、石山の奥、国分山の幻住庵に滞在した。九月末には郷里に帰り、冬は京都から大津に廻り、そこで元禄四年の正月を迎える。四月の十八日から五月の四日までは、京都、嵯峨の落柿舎におちつく。『嵯峨日記』を残す。五月五日から京都の凡兆宅で過し、『猿蓑』の編集に助言をしている。

ここで、今栄蔵氏編『芭蕉句集』から、抄出してみる。

△元禄三年 芭蕉 四十七歳

望ミテ二湖水ヲ一惜シムレ春ヲ

行く春を近江の人と惜しみける

猿蓑

石山の奥、幻住庵に入りて

真蹟短冊

まづ頼む椎の木もあり夏木立

〔猿蓑〕

夏草に富貴を飾れ蛇の衣

酒堂宛書簡

夏草や我先達ちて蛇狩らん

四月十六日付

堅田にて

病雁の夜寒に落ちて旅寝哉

猿蓑

海士の屋は小海老にまじるとぞ哉

猿蓑

湖国で過し、そこで作った右の句には、近江という土地柄が持つ
雲困氣にみちた佳句が多く、この僅かな抄出でもよくわかる。「夏
草」の二句は、洒堂あての書簡に並記し、「両句どちらがよいか判
断に迷っている旨を述べている」と頭註にいう。

石の香や夏草赤く露あつし

曾良「日記」

那須の殺生石での作。これにも、「夏草」の語が出ている。いずれ
も、同じ「夏草」を季語に持ちながら、高館での句の持つ迫力の強
さには足許にも及ばない。それは、「夏草やつはものどもが夢の跡」
の句単独でも、持つ強さであると共に、本文と相まってより光彩を
放つふしぎな魅力である。

この、ふしぎな魅力の源泉・原動力は、何からくるのだろうか。
北村季吟の『万葉拾穂抄』の自筆板下刊行も、同じ三年の暮にすみ、
近江で過すことの多かった芭蕉には、万葉集巻第一の「近江荒都」
の長歌、それが人麿作であるのとあいまって、芭蕉の心をとらえた
ことに始まる。人麿長歌を下じきすることで、「夏草」の季語に
も自信ができ、杜詩、謡曲「邯鄲」に助けられ、それらが見えかく
れするなかに、本文と句が、構成された。本文と句とは、相即不離
あるいは表裏一体の長歌と反歌の関係にも似ていることが、高館の
段の構想成功へとつながっている。

元禄四年の四・五月の十数日、京都の西郊嵯峨の落柿舎に滞在し
た時の「嵯峨日記」を見よう。「今宵は、人もなく、昼寝したれば
夜も寝られぬままに、幻住庵にて書き捨てたる反古を尋ね出して清
書す」（二十一日）とある。「幻住庵の記」の草稿を推敲している
姿が知られる。弟子の杜国の夢を見て目覚め（二十八日）夢につい

て語る中に、「睡枕記」とある。唐の李既濟撰の「枕中記」の記憶
違いであろう。塵生の夢物語の謡曲「邯鄲」は、太平記にひかれた
ものにもとづくといわれる。もちろん、高館の段への引用は、謡曲
「邯鄲」そのものからである。

廿九日 「一人一首」奥州高館ノ詩ヲ見ル

高館聳天星似宵 衣川通海月如弓

晦 其地風景聊以不叶。古人とイへ共不至其地時は

不叶其景

「一人一首」は「本朝一人一首」のことで、寛文五（一六六五）
年林恕（鶯峰）の編。天智天皇から徳川義直までの漢詩一人一首に評
などを加えたものである。同巻九に出る「賦高館戰場 無名氏」
の七言絶句の前二句を引いている。

この「嵯峨日記」の記事には注目してよい。「古人とイへ共」と
いちおう「古人」をたてながら、「其ノ地ニ至ラザル時ハ其ノ景ニ
叶ハズ」という。高館を实地に見て来た自信と感激の余勢で、文章
にもし、句にも詠んだ満足感を、この短かい中に語っているように
も読みとれる。

「奥州高館にて」と前書きして、「夏草や」の句を入集している
「猿義」は、この二か月後に刊行された。出版準備の時間的余裕を
考えると、「夏草や」の句の完成時期は、この嵯峨滞在までぐら
いが下限ではなからうか。そして、「夏草や」の句が、高館の段の本
文と相即不離の長歌と反歌との関係でとらえる観点から見るととき、
「おくのほそ道」の高館の段の執筆完成も、この嵯峨滞在までぐら
いと考えてよいだろう。

ここで、平泉、高館の段への「菅菰抄」の注を読みたい。

按ずるに、此一段は、是三代の盛を述んが為に、又端を更めてしばらく記の躰に筆す。されど、記は賦に劣れば、前の松島の段よりは、文勢いさゝか軽し。故に発端のことはを置かず。是亦其指揮を熟考すべし。

漢文の文体でいえば、「記」であるという。「前の松島の段よりは、文勢いさゝか軽し」ともいうが、さてどうであらうか。

いま、高館の段だけを見たが、芭蕉は、段ごとに、いろいろ、趣向をかかえている。ということは、おのずから、段ごとに、「文勢はちがう」と考えられる。松島や象潟の段にも、下じきがあると考えるが、別稿に譲りたい。

早く、『笈の小文』の「抑々道の日記といふものは」に始まる一文にもいうように、紀行文学であるからには、ただ事実を事実として記録するだけでなく、「黄奇蘇新のたぐひにあらすば云事なかれ」で、新味のない陳腐なものを排斥した芭蕉の考えが、みごとと結晶したものが、この「おくのほそ道」である。

「おくのほそ道」は、単なる旅行の実記ではなく、段ごとに構想にも、変化をつけ技巧をこらした、抑揚に富む文学作品である。

(五七・七・二八)

おくのほそ道・万葉集・嵯峨日記の本文引用は、日本古典文学全集本、謡曲「邯鄲」は、日本古典文学大系本、曾良の「旅日記」は、天理図書館善本叢書「芭蕉紀行文集」による。ともに巻、ページを略す。

注

- (1) 拙稿「古今六帖で読む源氏物語若菜」『中古文学』第九号 昭和四七年五月。
- (2) 拙稿「春草のと夏草や」『学燈』昭和五一年七月。
- (3) 『奥細道菅菰抄』の附録に文章論をのせ、服部南郭の言を引いている。岩波文庫「おくのほそ道」付、二二九ページ。
- (4) 斎藤茂吉著「柿本人麿」評釈篇・巻之上、三八五ページ。
- (5) 同右、四四二ページ。
- (6) 『万葉集総索引』巻一、十六(裏)〜十七(表)。
- (7) 『万葉拾穂抄』貞享版 万二下卅五〜卅六。
- (8) 『漂泊の詩人—芭蕉展』目録番号二五六、全文の写真とともに、五一ページに解説と解説がある。
- (9) 前田正雄氏「奥の細道と謡曲」『神戸学院大学紀要』3、二〇八ページ。
- (10) 注(3)と同書、二〇〇ページ。
- (11) 『奥の細道新解』一〇七ページ。
- (12) 小西甚一氏「兵どもが夢のあと」——芭蕉の句分析批評の試み2—『文学』昭和三八年九月。九八ページ。
- (13) 『奥の細道評論』一〇二ページ。
- (14) 『文学研究』四一 昭和二六年。一一〇ページ。
- (15) 『芭蕉その鑑賞と批評』二五九ページ。
- (16) 『国語展望』第五号 昭和三八年。一三〜一四ページ。
- (17) 『芭蕉句集』(『新潮日本古典集成』)二二六ページ。

△附記▽

本稿作成にあたり、松井油夫・木村正史・丹波章・吉村厚子・毛利正守・辛島正雄の諸氏より、親切なご教示をえ、感謝にたえない。